

研究論文

## ドメスティック・バイオレンス被害者が 被害を受けていくプロセスの検討

Examination of the process how the victims are exposed to domestic violence

米田 弘 枝<sup>1)</sup>  
Hiroe Yoneda

ドメスティック・バイオレンスの被害者が暴力を受けているにも関わらず、逃げないことは、援助を困難にしている。

筆者は、このプロセスを検討するために4名の被害者の協力を得た。

その結果、暴力による恐怖心や嫌悪感を抱いていたが、夫との関係を修復させるために、むしろ積極的に夫の方に接近していた。

被害女性の結婚観や、夫への期待や願望が、支援を困難にしていた。

被害者の認知が変わるときは、不快感が身体症状となって現れ、夫の行動が異常だと思うことができた時であった。

ドメスティック・バイオレンス被害者支援のためには、認知の修正を目指すことが大切で、この目的のために被害の出来事全体を俯瞰することが必要である。

【キーワード】 ドメスティック・バイオレンス、被害のプロセス、被害者支援

### 1. 研究の目的

ドメスティック・バイオレンスの定義は、配偶者等親密な関係にあるものから振られる暴力のことであり「配偶者からの暴力の防止及び、被害の保護に関する法律（以下DV法）」によると身体に対する不当な攻撃、または、心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。

内閣府の調査（内閣府 a）によると、女性の約3人に一人（32.9%）は配偶者から被害を受けたことがあり、約10人に一人（10.6%）は、何度も受けている。

命の危険を感じた経験も20人に一人（4.4%）であり、この数字は、この調査が開始されたDV法制定時からあまり変化していない。被害者に対す

る支援の体制を整えることが急務であるが、もともと両者の愛情を基盤として、婚姻という制度に入り、子どもが産まれて、生計を共にしているということを考えると、第三者からの被害とは全く異なる被害のプロセスをたどる（加茂）。

犯罪となる行為であっても、加害者が身内であれば、かなりの部分は許容されるし、また、許容されることを前提に暴力が日常的に行われる。

家庭内でのみ何故暴力が起きるのかについては、男尊女卑の意識、経済力の格差、男女の固定的役割分担の意識などがあげられる（内閣府 b）。

時間が経過するほど、子どもの成長に伴い、環境を変えることが難しくなり、歴史が積み重なると、どうしたらいいのかわかりながらも、よい解決方法が見つからないので、その時々暴力への

1) 立正大学心理学部 Faculty of Psychology, Rissho University

対処が重なり、相手の行動に振り回されながら、その日その時を過ごすことになるので、自らの行動の一貫性が失われ、善悪の判断基準もゆらぐ。

理不尽さを受け入れてしまうと、非が相手ではなく自分にあることになり、自信がなくなり、暴力を非難したり、暴力から避難する力が失われていく。

DVの支援にあたっては、このような被害者のたどる心理的プロセスを理解したうえで、そのプロセスの一つひとつを具体的に明らかにし、できごと、自分の不快な感情、相手に対する怒りや嫌悪感に気づき、その時々こそうせざるを得ないと思っただ行動を振り返り、自分の感情や感覚が間違っただいなかったことを思い出し、主体性を取り戻す過程に寄りそうことが大切であると考えられる。

しかし、支援にあたっては、暴力があるのに「なぜ逃げないのか」という素朴な疑問が常につきまとい、支援を難しくし、被害者に否定的な感情を抱きやすい。また子どもにとっては、虐待の加害者の行動を継続させているという意味で、加害者と同じ扱いとなり、ここでも被害者は否定的に評価される(米田)。

シェルターの利用や、保護命令など、被害者が避難するための制度はあっても、被害者に利用する意思がなければ意味をなさない。

何故逃げないのかという理由として、学習性無力感やストックホルム症候群などが説明概念として用いられてきた(小西)。内閣府の調査においては、別れなかった理由の中で、最も多いのは、「子どもがいるから、子どものことを考えたから」(58.9%)であり、ついで経済的な不安があったから(16.0%)となっている。

筆者は、長年DV被害者とのカウンセリングを行ってきた経験から、結婚という制度に入った女性は、暴力があっても、自ら、積極的に、そこにとどまることを選んでいると思われる例に出会うことが少なくない。自分の価値観の中で、「結婚したら離婚はいけない」、「離婚はしたくない」、「何とか穏やかにともに時間を過ごしたい」と、離れることを考えるのではなく、むしろ積極的に、離

れない選択をしている。

離れないために、顔色をうかがい機嫌を取り、自分のできる限りの対処をしても、なおかつ限界を感じた時に初めて無理かなと思うのである。無理かなと思うまでには長い時間がかかっている。そして、本人が無理かなと思わない限り、他者の介入があっても、離れる行動にはつながらないのである。

本研究では、被害者が限界まで離れない努力を続けるプロセスを明らかにし、支援者が、どのような介入をすることが適切であるかを考える手がかりをえることを目的とした。

## 2. 研究の方法

本研究の目的を理解し、被害の状況について詳しく説明することに同意を得た被害者4名から聞き取りを行った。

期間は、平成25年11月～12月。場所は筆者が関わった相談機関において面接を行った。

聞き取りの内容は、①暴力の始まりと内容②その時の感情③気持ち④行動⑤その他必要な援助についてである。

記述内容を検討するにあたり、感情と気持ちを分けにくい所も多く、時間経過も長期間に及ぶものは不明確であるため、便宜的に面接者が区分した。

なお、事例の記述にあたり、倫理的配慮として、個人が特定されることがないように、一部修正を行っている。

- |     |           |        |       |
|-----|-----------|--------|-------|
| 事例A | 妻33歳、夫35歳 | 結婚歴3年  | 子どもなし |
| 事例B | 妻42歳、夫36歳 | 結婚歴8年  | 子ども1人 |
| 事例C | 妻56歳、夫57歳 | 結婚歴36年 | 子ども2人 |
| 事例D | 妻36歳、夫47歳 | 結婚歴15年 | 子ども3人 |

## 3. 夫の暴力と妻の感情、考え、行動の経過

## 事例A

夫の暴力	妻の感情	考え	行動
第1段階 ・原因不明で不機嫌。理由を聞いても無視、1週間続く。 ・話しかけると睨む、返事しない。(月1～2回)	形相が怖い 緊迫感	あれ?と思う 正常化したい	・理由を聞く ・話しかける  ・なすすべがない
第2段階 ・妻退職後回数増加 ・物に当たり壁に穴をあける ・ささいなことにスイッチが入ったように怒り出す ・家事手伝わない	怖い ドキドキする	困っていたが 夫婦間のいざこざ、些細なことは実家に話せない。長女で両親には負担をかけたくない。	日記、メモを書く 一日一日ポジティブに過ごそうと、散歩したり、市民講座に参加して気を紛らわせる
第3段階 ・妻のけがや事故を非難 ・理詰めで、感情否定	恐怖心と劣等感	大丈夫かと言ってほしい 優しい言葉がほしい 正常化したい、 夫を信じたい、 愛されたい	機嫌をうかがう
第4段階 暴力の恒常化		夫は異常だと思うようになる	友人に話し、通院を勧められる。日記、メモを読み返すと、確かに耐えられない内容であった。

## 事例B

夫の暴力	妻の感情	考え	行動
第1段階 ・結婚前突然キレて激怒   ・新婚旅行に行く時から、意味が分からず再三怒鳴り、一晩中説教 ・その都度、謝る	びっくり、混乱   気になりつつも   不安	了解不能 男尊女卑意識の強い地方の出身者なので、女性らしさを強く求めるタイプかと思う。  すでに妊娠、結婚が決まっていた、離婚歴があり、年上で、子どもが産める限界年齢、一緒にやっていく強い意志。失敗したくないという気持、そんなはずはないと否定する気持ち やっていけないのではないかと、耐えられなくなって、シングルマザーになるのではないかと思ったが、まあいいかと思った。	その状況を受け容れた   深くは受け止めなかった

米田：ドメスティック・バイオレンス被害者が被害を受けていくプロセスの検討

<p>第2段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てには協力なし</li> <li>・お小遣い決められ、夫は妻の口座を管理するが、妻は夫の口座を知らない。</li> <li>生活費の分担も、不公平</li> </ul>	<p>諦め 大きな不満</p>	<p>お金のことを言うと必ずもめるので、もめるのがいや</p>	<p>一人で子育て受け容れる</p>
<p>第3段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事を辞めた時、怒り、暴言、説教が増え、些細なミスを徹底的に非難する。</li> </ul>	<p>恐怖心 気持ちのやり場がなくなり、救われない感じ、どんどん心が疲弊、どんどん辛くなる</p>	<p>夫にやさしく接しようという気持ちが一切なくなり、早く死ねばいいと思う 前向きになれず、不満ばかりがつのる</p>	<p>笑顔が消える</p>
<p>第4段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活費を下さいという、言ってもらえると思うな、その分稼いで来い。</li> <li>・説教は一度始まると深夜まで延々と続く。理解できないという非難、だまって聞くと、反応がないと責め続ける。</li> <li>・自尊心にかかわる所で、怒りのスイッチが入る</li> <li>・翌日は何事もなかったかのようにになるが、頻度は短く早く多くなっていく。</li> </ul>	<p>1週間前になると、ものすごい不安と緊張</p> <p>夫が帰ってくる時間になると、心臓がどきどきしてドアがガチャンと開いたとたんに震えがくる 緊張がいつもとれない。</p> <p>動悸と手の震えが止まらなくなる。</p>	<p>追い詰められる</p> <p>そのことばかり考えているので、頭が支配され全く集中できない。</p> <p>夫に異常性を感じ、モラルハラスメントだと思う九州男児の口うるさいのと違う</p>	<p>顔色をうかがいながら生活</p> <p>怒っていないとわかるまでは何も手につかない。 時々実家に帰る</p> <p>インターネットで調べる</p>
<p>ごめんねと言って3日後には同じ状態になる。始めは何年もなかったのに。</p>	<p>限界</p>	<p>ごめんねが許せない受け入れられない、夫のもとに戻りたくない</p>	<p>夫の行動パターン分析</p>

事例C

夫の暴力	妻の感情	気持ち	行動
<p>第1段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・結婚式の前日。何かか気に食わなかったみたいで、ものすごく怒鳴った。</li> </ul>	<p>驚いた。頭ごなしで怖かった</p>	<p>何か気に障ると大変と思った。 本当に結婚していいのかなとその時脳裏をよぎったが、結婚式を明日に控え、昔気質の両親に何て言ったらいいのかわからず、</p>	<p>そのまま結婚してしまった。</p>

<p>第2段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事仕事で、家を顧みず、家事育児一切手伝わずオムツも一度も取り替えたことがないばかりか、取り替えたおむつがそばにあるだけで汚いと怒鳴った。</li> <li>妻が病気の時も子どもをお風呂に入れてくれることもなかった。</li> <li>全く聞く耳持たず</li> <li>・子どもが夜泣きしても「ウルセエ、静かにさせろ、俺は明日仕事だ」と怒鳴られ、</li> </ul>	<p>夫の協力はあきらめていた。</p> <p>日曜の公園に行くとパパとママが公園に來てる姿を見るのが本当につらくとても寂しかった。</p> <p>置き去りにされて寂しかった。</p>	<p>離婚したいとは思わなかった、若い時は離婚など想像もつかない、親戚見ても離婚など全くない。離婚というのは、思考を超えた別世界の話。想像できない、とにかく結婚した以上、生活の維持だけを考えていた、相手は嫌だったりはずるが、それはそれで維持できる。</p>	<p>子育ても一人でした</p> <p>夜中子どもを連れて散歩していた。</p>
<p>第3段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何かカチンとくる、何か侮辱されたみたいなの、妻には理解できないことで、普通に言ったことが侮辱されたと思って怒りのスイッチが入る。</li> </ul>	<p>怖い</p>	<p>一緒に暮らせないとずっと思っていた。</p>	<p>寝室を別にした</p>
<p>第4段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を当てにする必要な金は渡す。</li> </ul>		<p>気持ちは離れていても、祈るような気持ちはあった。</p> <p>一緒に子育てしたいという願望</p> <p>わかるときが来るのかなと一緒に育てたいといつも思っていた。</p>	<p>子どもと3人で楽しく暮らした。</p> <p>ブランデー1本飲み、パチンコも毎日</p>
<p>嘘のかたまりだった。</p>		<p>真実が何もないことがわかり</p>	<p>離別を決意</p>

## 事例D

夫の暴力	妻の感情	考え	行動
<p>第1段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事を無理にやめさせられ結婚。</li> <li>・手をあげられることはないが、携帯で1時間に1回は行動チェック</li> <li>常に行動を監視、友人との交流もさせなかった。始めから支配。</li> <li>・理詰め</li> </ul>	<p>恐怖心でピーンと張り詰めている</p> <p>あきらめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早く実家を出たかった。</li> <li>・子どもを妊娠し、嫌な夫でもそこで生きていくしかない、無理に自分に言い聞かせた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日事細かに怒らせないように気を使う</li> <li>・怖くてノーと言えず、従う。</li> <li>・夫に常に連絡報告義務</li> </ul>
<p>第2段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事が終わる時間にお疲れさまとメールしないと機嫌が悪くなる</li> <li>・友人宅でも、急に不機嫌になり、無視が始まり、生活費をくれなくなる。</li> </ul>	<p>恐怖心</p> <p>身の置き所がなくなる。</p>	<p>機嫌を損ねないようにが大前提</p> <p>夫から認めてほしかった休憩すると、夫が自分を非難する気がする</p>	<p>顔色を見て、何でもごめんなさいと先に謝り、波風立てないようにしていた。</p> <p>休めない</p>

<p>第3段階 ・会社の部下のように妻を教育的指導 ・嫌がらせして言うことを聞かせる</p>	<p>おかしいと思う。</p>	<p>ここまで来てもまだ何とかならんんじゃないか、努力すれば分かってくれるのではないか、愛されていないのに期待してしまう。 自分を受け入れてくれる人がほしい、自信がほしい</p>	<p>自分のことはいつも後回し</p>
<p>第4段階 ・コントロールはだんだんひどくなり、どこに行くのもついてくる、メールも頻回。 ・返信しないと、帰宅してから、怒られ、長い説教をされる。</p>	<p>限界を感じる</p>	<p>夫に出会って全部奪われた。 夫が行動を管理していることには気づいていたが、いい妻でありたいと思った。</p>	<p>自分の人生ではなく、夫の人生の中にいて言いなりになり、努力した。</p>

## 4. 結果のまとめ

### (1) 夫の暴力

今回の4事例はいずれも、身体的暴力はない。些細なことで、怒りのスイッチが入り、その内容を検討すると、「主人と言わなかった」「言い返す時」、「意見を言う時」「批判する時」あるいは、妻には理解できないが、「自尊心にかかわると夫が思う時」など、妻との対等な関係を拒否しているようであるが、「怒鳴る」、「理詰めの説教」は延々と続く。「無視」、「不機嫌」は、屈折した甘えか、幼児的で、ちやほやされることを求めている可能性もあるが、非言語的な態度によって示されるものは、理詰めとは裏腹に、情緒発達の未熟さが表出されている。

その他、「行動監視」、「行動制限」、さらに、妻を否定し、困らせるために、経済的制約を利用。これらの暴力は、妻が専業主婦になった時からエスカレートしている。

家事育児には全く協力せず、妻の病気やけがにも心配するどころか、かえって否定し、妻を一人の人間として認め、家庭を共に築く意思がない。

どこにでもある家庭内のいざこざとは異質だと思われる。

### (2) 妻の感情、

夫の理不尽な行動に、驚き、混乱し、恐怖心や不安感、諦め、寂しさを感じている

### (3) 妻の気持ち、

暴力による恐怖心や不快感はあっても、「離婚など想像がつかない世界」、「親に心配かけたくない」、「妊娠している」、「子どもが生まれる限界年齢」、「失敗したくない」、「実家から離れたい」などの気持ちのために、暴力は容認されている。謝罪があるとさらに受け入れやすいようである。

更に、妻の側の期待や願望、「優しい言葉がほしい」、「正常化したい」、「夫を信じたい」、「愛されたい」、「ともに子育てしたい」、「家庭を共に築きたい」、「夫から認めてほしかった」、「ここまで来てもまだ何とかならんんじゃないか、努力すれば分かってくれるのではないか、愛されていないのに期待してしまう」、「気持ちは離れていても、祈るような気持ちはあった。一緒に子育てしたいという願望、わかるときが来るのかなと、一緒に育てたいといつも思っていた」。「自分を受け入れてくれる人がほしい」「子どもを妊娠していて、そこで生きていくしかない、自分に言い聞かせ、刷り込む」「いい妻であろうと努力する。」など、段階が進むほどに、夫の暴力はエスカレートするのだが、妻は離れる方向に行動するのではなく、むしろ

ろ、夫の理不尽さの穴埋めをするかのように、恐怖心や不安感が否認され、自らの願望、期待に向かって行動している。

夫の側には、対等な人間関係を営む意思はなさそうなので、この妻の気持ちや願望は伝わらないし、伝えようと努力すればするほど、かえって離れていくようにも見える。妻の側が、現実とは無関係に、一人相撲のように、暴力を受け容れ、結婚生活を継続させることに力を注ぎ、夫の方に接近を試み、徒労に終わるのだが、恐怖心や不安感の否認は続く。

#### (4) 限界を感じるとき

積み重なった、恐怖心や不安感が、否認できなくなり、動悸や震えなどの身体症状を呈するに至った時、あるいは、夫の行動が異常だと気づくとき、結婚生活を維持するための努力や夫に対する期待が、無意味なものであったことに気付いたときに、限界を感じている。

その時には、妻が、夫に対して抱いていた考えに変容が起きており、子どもがいても、経済的制約があっても、限界となっている。

ただし、そこに至るには、短くて3年、長くて36年の年月が経過している。

この経過を図に表わすと、図1のようになる。

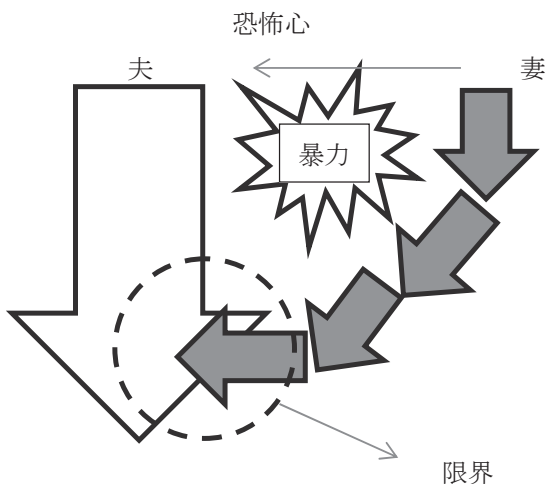


図1 DV被害のプロセス

## 5. 考察

以上の結果から、DV被害者は、暴力を受けても、結婚に対する、本人のさまざまな価値観や考え、夫に対する願望、期待などが、暴力による恐怖心や不安感、不快感を否認し、生活を維持する方向に、自ら努力している過程が明らかになった。

本人の考えが、変容するには、不快感が、身体症状として表出されるまでに至る時、長期間の夫の行動観察の結果、変化しないばかりかどんどんひどくなる、とわかる、あるいは、異常であると認識できることが必要である（図2）。

本人の考え方の変化がない間は、夫から離れるのではなく、接近する方向で努力が続けられる。この間に長い時間が経過すれば、理不尽さを容認することで、本人の方に、問題があるかのような劣等感や自責感も生じかねないし、本人の自己肯定感や、自尊心にも影響を及ぼす。

支援にあたっては、どの段階で、支援が求められるかにもよるが、このようなDVの構造の全体像を被害者とともに、俯瞰し、夫の暴力の内容、本人の否認されがちな感情、本人の価値観や考えを明らかにして、独りよがりな期待や判断をしていないか、本人が、不快感を抱きながらも、こうすべきとの思いこみによって感情否認して、願望や期待（相手は何も考えていないかもしれない）に賭けて更に努力を重ねてはいないか、を客観的に捉えなおし、感情と、考えの対立に目を向け、認知の変容を促すかわかりが必要である。

特に、夫の行動の意味を考えることは大切で、何が起きているのか、何か妻側に非があるのかを、具体的に明らかにし、客観的に捉えなおす作業は重要である。

そして、夫には変化の可能性があるのでどうか、期待や願望でなく、検討することは、被害者にとって、最も見たくない現実と直面することになる大事な作業であり、苦しい作業でもある。さらに、自分の努力が報われないものであると認知するのも、自分自身の努力が無意味であったことを認め、自分の価値観や、歴史を失うことに向き合わなけ

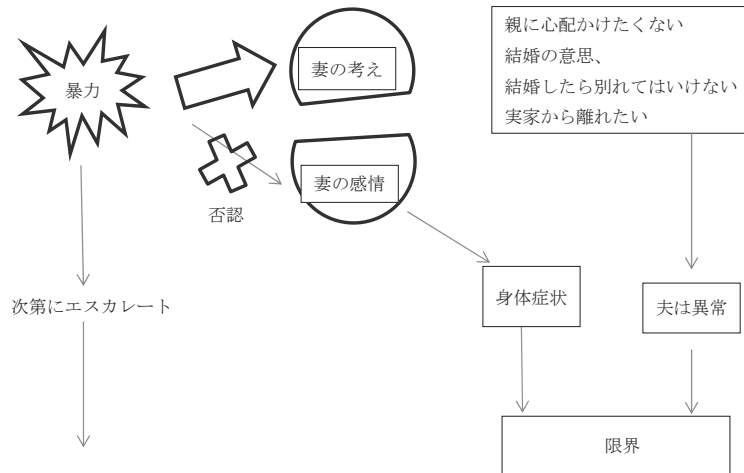


図2 被害者の心の動きと行動

ればならない過酷なプロセスである。

DV 被害者支援にあたっては、加害者が暴力を振るわなくなることが最も望ましいことなのだが、わずかな変化の可能性に賭けて、被害者は一生尽くすことを選択するのか、自分自身の感情に正直に目を向けて、自分の人生を歩むのか選択を迫ることになる。

この段階で、結婚の継続以外の選択に必要なサポート資源や具体的な知識の提供が重要になる。

図2は、被害者の心の動きと行動を表したものであるが、図1と合わせ、暴力被害の状況を客観的に捉えなおす時に提示するとわかりやすくなる。

最後に、「いい妻、いい母、いい嫁でありたい」との思いは、悪いことではないはずだが、具体的には何をする事なのか、夫の言いなりになることをさすのか、被害者が求めているものは何かを、具体的に考え直す作業も必要になる。

努力すればいつか、夫はわかってくれるだろうとの期待にはどれくらいの確率で見込みがあるのかも検討したい。

それでも一緒にやっていきたいなら、本人の選択として、主体性を持つべきであろう。

ただし、それが、人権侵害を容認し、子どもにとっての児童虐待である場合には、介入は必要なことである。

支援者は、家庭内で起きていることは何である

か被害者とともにしっかり見て、確認作業に寄り添うことが大切である。被害者が選択してきた行動に対しては、その努力と苦労をねぎらい、努力した力、夫の行動が異常であると思えたことを評価し、しかしなおかつ、対応困難な課題であれば、避けて通る方法も含めて対策を模索し、真正面からぶつかるのであれば、危険がないかを確認し、代理人を立てる方法、離婚の方法、慰謝料、親権等の情報提供と、専門家に関する情報提供、また、精神的被害は蓄積されていることによる医療的ケアの必要性などについても情報提供することが必要である。

### 参考・引用文献

- 内閣府 a 男女間における暴力に関する調査報告書 内閣府男女共同参画局 2012
- 内閣府 b 配偶者からの相談の手引 内閣府男女共同参画局 2005
- 加茂登志子 ドメスティック・バイオレンス 心的トラウマの理解とケア 第2版2006 じほう P.147-162
- 小西 聖子 ドメスティック・バイオレンス2001 白水社
- 米田弘枝 ドメスティック・バイオレンス被害者面接における課題 立正大学 臨床心理学研究第10号 2011
- 堀越 勝 野村俊明 精神療法の基本 2012 医学書院



## Examination of the process how the victims are exposed to domestic violence

Hiroe Yoneda<sup>1)</sup>

### [Abstract]

Not escaping, although the victims of domestic violence has received violence was helping difficult.

I got the cooperation of four victims to examine this process.

As a result, although there were fear by violence and a feeling of repulsion, the victims were approaching positively rather, in order to restore a relation with a husband.

The victim's concept of marriage, the expectation and wish for husband, were supporting difficultly.

When displeasure resulted in somatic symptoms and husband seemed to be unusual, Cognition changed.

For assistance of domestic violence victims, it is important to aim at cognitive correction, and, for the purpose, it is required to see the whole damage objective.

[Key Word] domestic violence, victim's process, victim's assistance